うさぎさんの楽しい毎日

人間狂愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うさぎさんの楽しい毎日

【Ｎコード】
Ｎ４９６３Ｘ

【作者名】
人間狂愛

【あらすじ】
基本的に自己中心的な主人公やルイズ達原作キャラを振り回して、たまに仕返しされたりな日常のお話です。
こっちの小説は原作キャラ死亡とかシリアスとかあまりありません。基本的に普通にコメディーなギャグです。

第一話　からかいやすいお兄様

ゼロの使い魔の世界にキターでございますよ。オリ主、マジ☆参上ですね。

別れた女性に滅多刺しにされて、死んだらゼロの使い魔に出てくるトリステインという国の伯爵家の次男に、何故か何故か生まれ変わっていた。二つの意味で意味がわからん。

何故、フッただけであんなに包丁でグチャグチャにされなければならないのだろう。何故、生前善い行いをした記憶もないのに転生したのだろう。

まぁ、この際どうでもいい。無神論者だから神様とか、あの世とか、転生とか、微塵も信じていなかったのだが、とりあえずせっかくの二度目の人生なのだから、おもいっきり楽しもうと思っている。

前世十六年と今世五年、合わせて二十一歳になると、人間落ち着くものだ。有り得ない現実も簡単に受け止めちゃえるものです。

――楽勝だ、異世界生活。

「ねぇ、お兄様聞いてる？　女の子はマジで怖いよ？　女タラシのお兄様は気をつけてね？」

「タラシじゃねぇよ。お前は何処でそんな言葉覚えてくるんだよ。てゆーか、それよりももっと子供らしく甘えてこいよ。まだ五歳だろ？　弟ができるって聞いて喜んでた俺に謝れよ」

イケメンの父親と美人の母親との間に生まれたイケメンお兄様は、五歳年下の僕を見て溜息を吐く。

現在、新しい家族の（こう言うと再婚したみたいだね）兄と仲良く談笑中。家族仲は極めて良好だ。

「なるほど。お兄様は男もイケるのですね？　お母様似の僕に欲情しちゃってるんですね？　きゃーたすけてー」

「違ぇよ。なんでお前はそういう風に話を捩曲げんの？　まだ五歳なのに反抗期なの？　いや、確かにお前は可愛いぞ。白うさぎみたいで、我が家のお姫様だ。でも俺は男には興味ないからな？」

僕の半分冗談でのからかいにも、兄は律儀に反応をしてくれる。家から出る事を許されていない僕に、兄は毎日のように付き合ってくれる。

やはりショタコンなのだろうか。いや、僕の見た目はロリだから、ロリコンかもしれない。まぁ、どうでもいいけど。

「そろそろ家族紹介でもしようか」

「えっ、いきなりどうした？」

僕は立ち上がりながらゆっくりと語り始める。その様子を見て、兄は不思議そうに首を傾げていた。

「この必死過ぎて気持ち悪い金髪碧眼のイケメンが僕の兄、クイント。年齢は十歳で風のトライアングル。よく暇な時は相手をしてくれるヘタレだ」

「だからいきなりどうしたんだ？　てゆーか気持ち悪いとか、ヘタレとか――」

「父親の名前はアルベルト。兄を大きくしたような容姿で、性格も兄そっくりのヘタレだが、風のスクウェアで魔法衛士隊隊長を務めている。家族大好きで親バカ＆愛妻家だ」

「――なんで無視？　えっ、なんなんだいったい？」

兄の言葉は聞き流しながら、ゆっくりと丁寧に言葉を紡いでいく。観客を前に舞台で演じるように、遠くまで響くように声高々に、身振り手振りを加えながら、笑みを絶やさず語り続けていく。

「母親はシルビア。僕と同じアルビノな見た目だが紫外線が効果抜群なんて事はなく普通だ。性格は基本的にのんびり屋さんだが、実力は水のトライアングル。娘が欲しかったらしく、自分に似た僕を娘のように育てている。たぶんドＳ」

追記として、名前的に傍に感じる度幸せになれそうな気がする。

「アリアちゃーん？」

そんな僕の様子に兄は更に困惑する。誰かいるのかと豪華な部屋の中をキョロキョロ見回したり、僕の頭をポンポンと叩いてみたりするが、僕は気にせず語り続けていく。

「そして最後に僕。名前はアリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ。人をからかったりするのが趣味で、それが原因で悲惨な死を迎え、この家の次男に転生した。とりあえず二度目の人生は深

く考えず、面白おかしく過ごせればいいと思っている」

「父上ーっ！　母上ーっ！　アリアが突然妙な行動を――」

ちなみに転生したという話は、既に家族にしたのだが、父親と兄は「それで最初に喋った言葉が『あのクソアマァ』だったのか」と納得し、母親は「あら、ラッキーね。二回人生を体験できるなんてすごいわ」と羨ましがっていた。シリアスなんてなかったようです。それでも私達の息子よ、みたいな感動話のカケラもありませんでした。

「以上。そんな風にバカな家族に囲まれて楽しく過ごしています。アリアでしたー」

「だ、誰がいるんだっ！？」

にこやかに手を振り、家族紹介を終えると、兄が抱き着きながら叫び出した。そして僕の肩を揺らしながら何度も同じ問い掛けを繰り返す。

「何が見えてるんだ？　誰かいるのか？　なぁなぁなぁなぁ――」

揺らす兄と揺れる僕。正直ただの悪ふざけだったのだが、こういうリアクションはうざい。幽霊でもいると思って、怖がっているのだろうか。

「――いたっ！？」

「お兄様。欝陶しいです。離しやがってください」

お兄様は頬をおもいっきり叩くと、漸く身体を揺するのをやめた。僕は溜息を吐いて、そんなお兄様を蔑みながら睨み付ける。

「ご、ごめんアリア――ってこわっ！？　なにその眼こわい。見下すように虫けらを見るように俺を見るなっ！」

お兄様は僕の目が気に食わなかったのか、僕の目を手の平で慌てて覆い隠す。

弱虫、毛虫、羽虫以下のお兄様には、まだマゾ属性は芽生えてないようです。弟としては安心ですが、兄にそっくりなお父様は、こうやって睨んでも喜ぶので、目覚めるのも時間次第ですね。可哀相なお兄様。

「なんで今度は哀れむような目で俺を見るんだ？」

お兄様は手をそっと離し、ゆっくりと覗き込むと、今度は同情する瞳に変わっていたので首を傾げる。

「世の中には知らなくていい事があるのですよ。今回の事はそれです」

「そ、そうか？」

「ですです」

よくわかっていない馬鹿なお兄様をごまかすように僕は笑う。自分の将来を嘆くには、まだまだお兄様は若すぎるのですよ。

「まぁ、いっか」

お兄様は笑う。自分の未来像を弟が勝手に想像して哀れんでいるとは知らず、満面の笑みで笑う。

僕はそれを見て、ひそかに涙を零した。

第二話　初体験はサディスティックに

この前から子作りに励むように頑張っていた杖との契約が、漸く完了した。そういう事で早速だが、今日から魔法の練習を始めるらしい。

今日からマのつく職業ですね、と柄にもなくはしゃいでしまうのは仕方がない。魔法なんて前世では空想の中にしか存在していなかったのだから。

厨二病患者が何度も夢見る魔法。僕も子供の頃は魔法を使って悪戯したいなんて可愛いことを考えていたものだ。

この日の為に、知識だけは頭に入れてある。さぁ、魔法使いアリア様の誕生でございますよー。

「――という訳で、私が家庭教師を務めるカーミラです。よろしくお願いします。何か質問はありますか？」

二十代後半辺りの真面目そうな女性が僕を見つめながら微笑む。

吸血鬼のような名前の彼女は母親の知り合いで、兄の家庭教師でもあるらしい。実力は風のトライアングルで、兄曰く、教え方も上手いらしい。

「よろしくお願いします。お兄様の童貞は美味しかったですか？」

「ぶふぅ――えっ、えっ？　いや、私はそんなことしてませんっ！」

質問と聞かれ、パッと思い付いた事を尋ねてみると、吸血鬼さんは真っ赤な顔で否定した。

今日も僕はいつも通り。誰が相手でも自分のやりたいようにすると、母親の胎内にいた頃から決めている。

しかし、からかいがいがありそうな先生ですね。

「あのヘタレ短小包茎早漏童貞野郎にまだ手を出してなかったのですか？　押しに弱いので簡単に――」

「こ、子供がそういう話をするものじゃありませんっ！　それに私はそういう趣味はありませんっ！」

僕が溜息混じりに言葉を紡ぐと、吸血鬼さんは更に真っ赤になる。

いい歳して結婚せずに家庭教師なんてやってるんだから、生徒狙いのショタコンなのかと思ったら、どうやら違うみたいだ。ただのいきおくれか。

ちょっと誘惑するだけで、次期伯爵夫人は間違いないのに勿体ない。

「こほんっ。とにかくまずは座学から――」

「なるほど、これがフライですか。便利ですね、魔法って」

「――って、飛んでるしっ！？」

吸血鬼さんが仕切り直して授業を始める前に、僕は我慢出来ずに

魔法を使ってみる。暇だったから屋敷にある書物を制覇した僕に今更、座学なんて必要ありません。

「なにこの子、……クイント君と全く違う」

全く制御出来ない僕を呆れ顔で見つめる吸血鬼さん。僕を自由に動かすなんて、王様でも無理ですよー。

「ほっ、着地成功！」

魔法を解除して地上に降り立つ。そして両手を広げてポーズを決めると、吸血鬼さんは溜息を吐いた。なにやら疲れたご様子だ。

「こほんっ」

さて、初体験の結果（卑猥な意味ではない）から思考を深めると、どうやら僕はちょっとやそっとでは、精神力切れで魔法が使えなくなる、なんて事はなさそうだ。

「こほんっ」

スクウェア並に身体の中に溜まっている（卑猥な意味ではない）だろう。前世持ちはチートだのう。

「ごほっ、あー、あー」

そんな風に考え込んでいると、咳ばらいがうるさく感じたので、ちらりと吸血鬼さんを見る。何か用があるのだろうか。

ああ、そういうことか。

「褒めてくれてもいいですよ？　頭を撫でるのを許可します」

頭を差し出しながら微笑むと、吸血鬼さんは苦笑いをする。どうやら違ったみたいだ。

吸血鬼さんが困っているのを見て僕は勘違いに気付いた。

しかし、そんな僕の心情を知らない吸血鬼さんは苦笑を浮かべながら何故か僕に近付いてくる。
まさか頭を撫でる気なのだろうか。

「あー、うん。すごいすごい」

僕の目の前で立ち止まり、棒読みで褒めながら頭を撫でる吸血鬼さん。うん、欝陶しい。

「触んなです、雌豚」

僕は吸血鬼さんの手を振り払い、唾を吐き付ける。変態にはご褒美だが、吸血鬼さんにはご褒美ではなかった為、彼女は泣き出してしまった。

「もぉー、なんなのよぉ。こんなの聞いてないわよ、うわーん――」

情けない大人だ。僕は蔑んだ眼差しで彼女を見つめる。

「ぶーぶーうるさいですよ、雌豚。この程度で泣くなんて子供ですか。さっさと授業の続きをしてください。さもないと叩きますよ？」

「ううっ、ぐすっ――」

僕の言葉を聞いても泣き止まない雌豚。芝生の地面に座り込んで、子供のように泣きじゃくっている。

なんという豆腐メンタル。

「ほら、雌豚。さっさと立ち上がれです」

「いたっ、ううっ――」

横っ面を引っ叩いても彼女は動かない。僕はその様子に苛立って、髪の毛を掴んで無理矢理立たせる。

「ぺっ！」

そして顔面にまた唾を吐き付けると、彼女は更に大声で泣き叫んだ。

「うわーん、もうやだよぉ――」

僕はそのうるささに耐え切れず、髪を掴んで地面に叩き付けた。

「お、お嬢様ーっ！？　ご無事で――えっ！？」

そんな騒ぎを聞き付けてか、使用人の一人が授業をしていた庭へと大急ぎでやってくる。どうやら僕が泣いていると思ったらしく、泣き叫ぶ家庭教師を見て唖然とする。

「いったい何があったのですか？」

使用人は恐る恐る僕に尋ねる。ちなみにこの瞬間も雌豚は泣き叫んでいる。

「かくかくしかじか」

「しかくいむーぶ、でございますね？」

事情を説明すると、使用人は地面にはいつくばる雌豚を哀れんだ瞳で見つめる。先程の取り乱していた様子はなく、今は完全に落ち着いている。

「最近の若い者は根性が足りねぇですね」

「肯定です。お嬢様が言う台詞ではありませんが」

「メイドさんも最近の若い者に余裕で入るけどね」

「失礼しました」

「ううっ、ぐすっ、ひぐっ……、ぐすんっ――」

地に這う雌豚を放置して、使用人と談笑をする。この使用人さんはなんだか気が合いそうな気がする。

「そういえばお嬢様って男に対しての呼び方じゃないよね？」

「肯定です。ですが、奥様から呼び方が義務付けられていて、破れば解雇されてしまいます。それに違和感はないのでよろしいかと」

「女装趣味の変態野郎ではないからね？」

「わかっております」

僕の素朴な疑問に即座に答える使用人。五年間不思議に思っていた謎が漸く解明された。

「あ、それと――」

「なにこの地獄絵図……」

ここでお兄様登場。草花に囲まれた緑豊かな空間で、笑い合う僕と使用人、泣き叫ぶ雌豚を見て言葉を漏らす。

「何やってんだよっ！？　えっ、そこのお前（使用人）もこの状況を不思議に思わないの？」

僕と使用人に尋ねるが僕らはただ笑顔を浮かべるだけだ。

「こわっ！？　なんなのお前ら？　と、とりあえず大丈夫ですか、カーミラさん？」

お兄様は僕等の反応を見て若干引きながら後ずさる。しかし、地面に這う雌豚をほって置けず、彼女に近付いて身体を支えながら立ち上がらせようとする。

「きゃー、お兄様が女性を泣かせてるですぅー」

「い、いけませんよ、坊ちゃま。女性には優しくと――」

「おいいいいいい！？」

僕達はそんなお兄様を見て、事前に計画していたかのように、大きな声を出して騒ぎ出す。

「どうなさいました？」

「如何なされました？」

「坊ちゃまが何でしょうか？」

メイドA、メイドB、メイドCが現れた。

「い、いや、これは違っ――」

お兄様は必死に言い訳しようとする。

しかし、効果は今一つだ。

「坊ちゃま……」

メイド達の冷たい眼差し。

効果は抜群だ。

「なんで俺がこんな目に――」

こうして魔法体験初日は比較的平和に終わった。

第三話　赤い敗北

部屋中、桃色で埋め尽くされたファンシーな空間。この無駄に可愛い部屋が僕の部屋だ。

今、中には僕と、お兄様と、あの日仲良くなった使用人がいる。ちなみに、名前はフランシアというそうだ。

あの雌豚はその日の内に家庭教師を辞めてしまった。そしてその件が兄ではなく僕のせいだとバレて、食事やトイレなど以外自室で謹慎の上、２４時間使用人に監視されている。

一応、僕もやり過ぎような、そうでないようなって感じで反省はしている。後悔はしていない。初日はもう少しソフトにやるべきだった。気分に任せて突き進んでしまうとは、僕もまだまだ子供のようだ。

「なんなのお前？　カーミラさんの何が気に食わなかったの？　何か恨みでもあったの？　あと俺にも」

現在お兄様による説教中。あの雌豚が好きだったのか、珍しく噛み付いてきている。

さっさとキメておかないから後で後悔するんですよ。まぁ、前に後悔しておくなんて出来ないですけどね。

「僕は気に入ってたですよ？　お兄様並に面白い玩具でしたし。あと、恨みはお兄様共々ありません」

僕はベッド（これも桃色）の上で転がりながら返事をする。良い教師か悪い教師か尋ねられると、何も教えてもらっていないし困るが、彼女はユニークだった。

「……実の兄を玩具扱いかよ」

僕の言葉にうなだれるお兄様。その様子を見て、僕は笑顔になる。

「あれですね。お兄様を虐めていると濡れます」

「おい、やめろっ！　子供が言う言葉じゃねぇよ。てゆーかアブノーマルだし、それにお前の性別じゃ濡れねぇよ！」

僕の突然の発言に、お兄様は赤面しながら否定的な意見を述べる。前世の話をしているのに家族全員子供扱いはひどいと思う僕です。

「あらら、耳年増ですねお兄様。おませさんですねお兄様。メイドで筆下ろしでもしました？」

「してねぇよ！！」

お兄様は耳まで赤く染めながら怒鳴る。

豊富な知識を褒めたつもりですが、お兄様は不満なようです。もしくは軽々しく童貞を捨てる発言がダメだったのでしょうか。『童貞も守れないヤツに女は守れねぇ』って言っていた気もするですし。

「ごめんなさい、お兄様」

僕はベッドの上に座って深く頭を下げる。すると、お兄様が嬉し

そうに微笑んだ。

「漸くわかっ――」

「お兄様は童貞です。生涯守り通せるはずです」

「――お前、兄を嘗めているだろう？」

僕の言葉にガックリと凹み、それからお兄様は笑顔で怒り出した。

「舐めてほしいのですか？」

「違うっ！」

首を傾げながら尋ねると、お兄様は即座に否定する。

「ああ、もうやってらんない」

お兄様はそう言うと素早く立ち上がる。

「どうしました？　お暇ですか？　それならジャンケンで負けたお兄様が一枚ずつ脱いでいくゲームでもしませんか」

「脱ぐの俺だけじゃねぇか！」

「僕に脱いでほしいのですか？　僕を脱がせたいのですか？　もしくはフランシアを脱がせたいのですか？」

僕が問い掛けていくと、お兄様はせっかく正常な色に戻っていた顔を、どんどんと赤くしていく。

「そんな訳ないだろうがっ！」

そして静かに否定の言葉を告げる。

「もういい。俺はもう付き合ってられん」

お兄様はそう言いながら扉の方へ歩いていく。そして扉を開いて、こちらを見る。

「じゃあな、一人で遊んでろ」

――バタンッ。

大きな音を立てて扉が閉まる。捨て台詞と共にお兄様は逃げるように部屋を去っていってしまった。

「僕と話をしていてムラムラしてしまって、童貞を捨てに行ったのでしょうか」

「お嬢様。それはないかと」

僕が独り言を呟くと、先程まで黙って無言で待機していた使用人が即座に否定する。

十歳だと精通すらきていないか。それに巨大化もしないだろうし。

僕は使用人の言葉に頷く。

しかし、それだと理由がわからない。

「女性がいるのに猥談されて恥ずかしい的な？」

「否定です」

「からかわれるのが嫌になった？」

「それも否定です」

えっ、それはいいのか。

「意味がわからないお兄様ですのぉ」

僕の疑問に無表情で否と答える使用人。この様子だと彼女はお兄様について何か知っているらしい。

僕は頭を抱える。二十一年の経験を持つ僕にもわからないとは、思春期の少年は難しい。

「坊ちゃまはお嬢様を心配しているのですよ。何年かすればお嬢様も魔法学院へ通いますし、そこでも同じ行動をとってしまうのではと。友達ができないのではないかと」

僕が悩んでいると使用人は案外簡単に理由を教えてくれた。そうか、そういうことか。

「それで茶化しながら相手をする僕に腹を立てたと？」

「肯定です」

使用人は満足そうに頷く。まさかお兄様がそんな心配をしていたとは知らなかった。ブラコンですか。

しかし友達の心配をされるのは心外だ。前世では愉快な仲間達に囲まれて楽しく過ごしていたのに。

まぁ、心配してくれるのは嬉しいですけどね。

「子供の気持ちを理解するのは難しいですねぇ」

「肯定です。お嬢様が言う台詞ではありませんけどね」

僕が笑いながら呟くと、使用人は無表情で頷いた。心配しているなら素直に言えばわかるのに、ツンデレは難しい。

「てゆーか一人で遊んでろって言ってたけどフランシアがいるよね」

僕は忘れられていた使用人に向かって微笑む。

「肯定です。お嬢様と遊ぶ気はありませんが」

「――えっ？」

すると、使用人は予想外の返事をしてきた。　僕が不思議そうに見つめると、使用人は首を傾げる。

「遊んでくれないの？」

「肯定です。私はお嬢様の玩具ではないので」

使用人の言葉にしょんぼりとする。なにこの生意気な使用人。

「なら、えっちぃことでもする？」

なんとかこの使用人を困らせたい僕は、兄をからかうように笑いながら言葉を紡ぐ。

「否定です。どうしてもと言うなら泣き叫んでも止めずにイかせ続けて差し上げますが」

しかし使用人は赤面一つせず、無表情のまま淡々と返事をしてきた。しかもめちゃくちゃ怖い返事を。

「……遠慮します」

――完敗。頭を下げて断りながら僕の頭の中にはその二文字が浮かんでいた。

「残念です。本音を言えば毎日お嬢様を犯したいと考え――」

「お母様助けてぇ！！！！」

僕は慌ててベッドから飛び出して部屋から出ようと走りながら叫ぶが、使用人はその行動を予想していたのか、僕の手を掴んでベッドにほうり込む。

そして僕の上に馬乗りになりながら、口を手で塞ぐ。

「――お部屋から出てはいけませんよ？」

舌舐めずりしながら告げられる台詞に、僕は涙目で何度も頷く。

「それとあまり騒がないように」

何度も何度も頷く。今世で最初のピンチに、僕は蛇に睨まれた蛙そのものだった。

「良い子ですね」

使用人は片手で僕の両手を抑え、もう片方の手で、僕の太股を摩る。僕はされるがままで、ビクビクと怯えるしかない。前世で経験があるのに、何故か怖くて動けない。

そして使用人の顔が僕の顔に近付いてくる。僕は怖くて目を閉じた。

一秒、二秒、三秒、四秒、五秒、六秒、七秒、……。どれくらい経っただろうか。暗闇の中で震えながら待つが、何も起こらない。

僕は恐る恐る瞳を開く。

「――冗談ですよ」

使用人の顔は目の前にあった。しかし、どんどん距離が開いていく。

「もしかして期待していましたか？　申し訳ありません、お嬢様」

僕の両手を離し、不出来なウインクをして、使用人はベッドから離れていく。

「――マセガキさんですね」

僕は真っ赤な顔で俯くしかなかった。

第四話　レッツパーリィー

――あの敗北から数日後。
突然だが、現在パーティー会場。ヴァリエールさん家のルイズちゃんが五歳になったから、誕生日パーティーやっちゃいますよ的な感じで、貴族の皆さんが集められた。僕達ルチアーノ家もそんな貴族達の仲間だ。

僕にとって初めての外出は知らない人の誕生日パーティーなようです。

「そんな感じですにゃー」

「あらあら、そうだったの」

そして、いきなり桃色の髪のお姉さんに捕獲されて、膝の上でお話し中。お姉さんはものすごいニコニコしてる。

「ウチのルイズのパーティーに来てくれてありがとうね」

「いえいえ。こちらこそ、ご招待ありがとうございます」

頭を撫でられながら首を振る。

なんだろう、この人といるとめちゃくちゃ和む。癒される。動物と仲良しな理由がわかった気がするよ、うん。

「あ、そういえば自己紹介がまだですね。アリアです。ルチアーノさん家の次男やってます。このドレスはお母様の趣味って、ああ、

喉は――」

「うふふ、私はヴァリエールさん家の次女のカトレアよ」

喉を撫でられ思わずうにゃうにゃとなってしまう。

――なんというテクニシャンっ！

「うにー、こるはしゅばらしい……」

「見た目はうさぎさんなのにねこさんみたいね」

彼女は笑顔のまま僕を撫で続ける。年頃の貴族の娘さんが男にこんな事をしていていいのだろうか。いくら此処が隅の方で目立たないといっても、ダメな気がする。いや、五歳程度で、しかもドレスを着ていて男に見えないから平気か。

「ええ、気にしなくていいわよ。貴方はおとなしく撫でられてなさい」

心が読まれてる。流石はヴァリエール家次女。読心術もお手のものか。

「何となくわかるだけよ」

僕は目を細めながらされれがままに、快楽に身を任せる。

――此処が楽園か。

「ああっ！　あんた、ちぃ姉様から離れなさいよっ！」

しかし、そんな心地良さは幼女の声で止まってしまう。どうやら桃色お姉さんが彼女の声に反応して、手を止めたようだ。

僕は声がした方を見る。

すると、本日の主役がそこにいた。

「あれがヴァリエールさん家のルイズちゃんですか」

「ええ、そうよ。可愛いでしょう？」

ぷんすかぴーと怒りながらこちらに歩み寄る幼女を見ながら、桃色お姉さんに尋ねてみると、どうやら正解だったようだ。

主人公に御対面キターでございますよー。

僕は幼女に微笑みながら話し掛ける。

「はじめまして、アリアです。気軽にアリア様と呼ぶ事を許可します」

「ルイズよ――って、いきなり様付けを勧めるなんてどういう事っ！？」

桃色お姉さんに飼い馴らされながら自己紹介をすると、幼女は良いツッコミをくれた。これは良い遊び相手になりそうな予感／Ｄｉｒｅｎ　ｇｒｅｙ。

「それよりもちぃ姉様から離れなさいよっ！」

幼女は僕の位置にご不満な様子で、僕の腕を引っ張りながら引き離そうとする。しかし、桃色お姉さんにがっちりと抱き締められているのでびくともしない。

ところで、今更だけど桃色お姉さんってなんかエロそうだよね。

「ちぃ姉様って呼ばれてるのですか？　僕はなんと呼べば？」

「ご主人様かしら？　うふふ」

「私を無視するなーっ！」

唸る幼女、首を傾げる僕、笑うお姉さん、怯える僕、怒る幼女。まさかのペットとして飼う気満々な桃色お姉さん（卑猥な意味ではない）に僕はビクッとする。

「離れなさいよーっ！」

「カトレアに言ってほしいです」

「ご主人様でしょ？」

「うがーっ！！」

幼女が唸る。ちぃ姉様好き好き大好き超愛してるなルイズにしてみれば、いきなり大好きな姉が盗られてしまったみたいで不満なのだろう。

「どうしたのですかルイズ。そんなに騒いでみっともない」

そんな騒ぎを聞き付けてか、招待された貴族達を掻き分けて、ルイズママ《伝説よりもチート》が現れた。桃色三色ビンゴですね。

「お、お母様。だってコイツが――」

僕を指差しながら幼女が俯く。桃色お姉さんも僕も微動だにしない。

「おや、もしやシルビアの娘ですか？　いや、あの娘には息子しかいなかったはずですが」

僕を見てチートが首を傾げる。確かにこんなドレスと母親そっくりの容姿ではわかりにくいだろう。

「息子です。母の趣味でドレス着てます」

「えっ！？」

僕の言葉に幼女が驚愕する。予め予想していたのか、チートは驚いていなかったが、何故か苦笑している。

「あの娘は変わりませんね」

溜息混じりにチートが呟く。

「お母様をご存知なのですか？」

「ええ、まぁ」

僕は気になって尋ねてみると、チートは肯定した。そして昔を思

い出してか、チートは微笑む。

ヴァリエールと、しかも伝説よりチートな存在と知り合いだったとは、全く聞いてなかったです。

「お母様。私、この子を飼いたいんですが――」

「ち、ちぃ姉様っ！？」

そんな僕達の会話を聞いて桃色お姉さんが突然爆弾発言をかます。

幼女はそれに驚愕。さっきから幼女は驚いてばかりだ。

「私、この子といると、何故か体調が良いんですの」

「コイツは人間ですよちぃ姉様っ！？　確かにうさぎみたいですけど」

漫才をするように会話をしていく二人を僕とチートは黙って見つめる。当事者の僕を置いて話がどんどん進んでいくが、僕は特に何も言わない。

だって、どうでもいいもの。流れに身を任せるのが僕です。

そして話を聞いてチートは何度か頷くと、何か思い出したのか突然二人の間に入り込む。

「ふむ、わかりました。とりあえず私はシルビアと話をしてきます。貴方達は此処で待っていなさい」

そして、そう言い残して去っていった。

「お母様っ！？」

そんなチートの言葉が信じられず、幼女は口をあんぐりと開けながら驚愕している。

気持ちはわかる。人間を、しかも貴族をペットにするのはどう考えても、いや、よく考えなくてもまずいだろう。

幼女は将来犬（種族人間の平民）を飼う事になるだろうけど。

「あ、あんたはなんで何も言わないのよっ！？」

依然として膝の上に乗ったまま、黙っている僕を見て、幼女が喚く。僕はそれを聞いて笑う。

「そりゃあ、現実的に次男坊とはいえ貴族の家の子供をペットにするなんて不可能だからです」

僕の言葉に幼女は納得し、喚くのをやめて落ち着く。現実的に考えて不可能です。

「ま、まぁ、そうよね。確かに有り得ないわ」

「ですです」

僕が肯定すると、幼女は安心したのか可愛らしく微笑む。そして最初の話題を思い出してか、僕の腕をおもいっきり引っ張り出す。

「てゆーかあんた、いいかげんにちぃ姉様から離れなさいよ」

「カトレアが離してくれにゃーのですよ」

僕達が話しているのを見ながら、あらあらうふふと頭を撫でる桃色お姉さん。こういうのも両手に花と言うのだろうか。

とりあえず手を引っ張るな、幼女。実際ものすごく痛いです。

しかし、まさか恋愛フラグではなく、ペットフラグが立つとは予想外だったです。いや、恋愛に興味はないですけど。

「ちぃ姉様ぁ！」

「うふふ」

「の、喉はらめぇ――」

喚く幼女、笑うお姉さん、悶える僕。

僕等はこんな感じでパーティーを過ごしたのだった。

第五話　ＫＹ（空気読みません）

朝の食事後、爆弾発言が飛び出した。

「……突然だが、来週からアリアはヴァリエール家で生活する事になった」

泣きながら喋るお父様。これが僕の父親で、この国の魔法衛士隊隊長です。

食事中から様子がおかしいと思っていたら、そういうことか。それにしてもどんな交渉をすれば息子をペットとして預ける事を、この家族大好き人間に認めさせたのやら。

「どういう事だよ、父上！？」

そんなお父様の言葉に当然、納得がいかないブラコンお兄様は、机を叩きながら立ち上がりお父様に問い掛ける。

「家庭教師はアリアが辞めさせちゃったし、次の家庭教師もどうせアリアの相手はできないだろうから、カリーヌさんに魔法教育をお願いしたのよ」

そんなお兄様の疑問にお母様が答える。僕はそれを聞いて納得した。

ペット兼弟子か。

「で、でも――」

「もう決まったことだ。男らしくアリアを見送る準備をしろ」

納得せずに抗議しようとするお兄様を止めるお父様。貴方めちゃくちゃ泣いてるじゃないですか。

流石はファミコン（ファミリーコンプレックス）。せっかく過保護に育ててきた息子が来週から魔窟入りですものね。

「使用人のフランシアを世話役として連れていけ。風邪には気をつけろよ？　寂しくなったらいつでも帰ってきていいからな？」

お父様が泣きながら話す言葉に一つだけ納得がいかず眉が吊り上がる。あの使用人には勝てる気がしないので、できればもっと扱いやすい使用人が良いのですか。まぁ、言っても無駄ですかね。

「私も一週間に一度はヴァリエール家にお邪魔するからね？」

しかし、僕の心情を気にすることなく、話しは進んでいく。

お母様は僕を膝に抱えながら笑う。怪物に娘のように愛する息子を送るっていうのにめちゃくちゃ笑顔ですね。ドＳですか。

「まぁ、なんとかなるですよね」

ぎゃーぎゃーうるさい男二人と、笑顔が黒いお母様を見て、僕は呟く。

目指せチート化。

☆

時間が経って来週がきた。
場所も変わってヴァリエール家。

「どうも。アリア・ド・ルチアーノです。攻撃力２３００守備力１５００で、必殺技はギャラクシービンタ。好きなラーメンはチャーシュー麺。好きな乳製品はいちごオレ。好きなケーキはいちごショート。将来の夢はブリタニアをぶっ潰すことです。どうぞよろしくお願いします」

「アリアお嬢様の世話役として来ました、使用人のフランシアです。お嬢様の事は深く考えないで相手してあげてください」

二人一緒に頭を下げる。ヴァリエール家一同に囲まれながら挨拶をしてみるが、カトレアさんがニコニコしているだけで、他の全員はみんなぽかーんとしていた。

「あー、おほん。よろしく頼む」

髭を生やした厳ついオッサンが咳ばらいをしながら言葉を絞り出すと、それに続いて全員自己紹介をしていく。

髭公爵、チート、眼鏡、アニコン（アニマルコンプレックス）、幼女、――ちぃ覚えた！

「ルイズ。アリア君に屋敷を案内してやりなさい」

「は、はいお父様」

髭公爵が告げると幼女は椅子から立ち上がり、僕の目の前に立つ。使用人が僕の後ろに立っているので、サンドイッチにされた気分だ。

「ほら、行くわよ。私が案内してあげるんだから感謝しなさ――」

「ギャラクシービンタァーッ！」

「――へぶっ！？」

何となく腹が立ったので、必殺技を発動してしまった。倒れる幼女を見て、幼女の家族は突然の事に唖然として、全く反応ができない。

「ほら、行くですよロリビッチ。案内させてやるから感謝しろです」

そして僕はそんな幼女を引きずりながら部屋から出ていく。それに使用人も続く。

部屋の中からは騒ぐ髭公爵と宥めるチートの声が聞こえているが気にせず、どんどんと廊下を進んでいく。

「は、離しなさいよっ！」

幼女は喚いている。

離しますか？

はい

→いいえ

「ちょ、引きずらないで、さっさと離しなさい、コラ、――ちょっとっ」

雑音をシャットアウトしながら先へ進み、使用人も黙って付いてくる。トリステイン一の演算力（自称）は伊達ではない。

「離しなさいってばっ！」

幼女が僕の腕を引っ掻く。ふむ、そろそろ離してやるか。

「あばっ！？　――何すんのよっ！？」

パッと手を離すと幼女は顔面を強打するが、彼女はそれを気にせず、すぐに立ち上がる。なかなか鍛えられているようだ。流石チートの娘。

「あんた、こんな事していいと思ってるの？　私は由緒正しきラ・ヴァリエール公爵家の三女よ？」

幼女が偉そうにない胸を張る。僕はそれを見て鼻で笑った。

「な、何がおかしいのよ？」

「幼女は別に偉くねぇですよ。女は家督を継げません。次期公爵は長女の婿となるでしょう。では幼女、貴女はどうなるのですか？　いずれ誰かに嫁ぐのですよね？　それだとヴァリエール家ではなくなりますよ？」

「肯定です。それに家柄の話をすれば、カリーヌ様は弱小貴族出身らしいですしね」

よくあるアンチ的な台詞を五歳の幼女に言ってみると、使用人もそれに続く。しかし、いくら頭が良くても子供には難しかったらしく、首を傾げている。

「と、とりあえず私の名前は幼女じゃなくてルイズよっ！　あとお母様を馬鹿にしたら許さないわよ！？」

睨み付けながら怒鳴る幼女。家族想いなのは良い事です。

「お嬢様もこれぐらい可愛げがあればよろしいのに」

幼女を見つめながら使用人が小さな声で呟く。合計二十一歳の大人に無茶言わないでください。

「さて、とりあえず案内してほしいのですが」

僕は仕切り直して、幼女に案内を求める。すると、幼女はまた無い胸を張り、威張りながら声を出す。

「いいわよ。着いてらっしゃい」

そして一人先にズンズンと進み出した。

「僕らも行くですよー」

「肯定です。公爵家の三女を一人にするのはあまり良くないかと思われ」

僕達も後を小走りで追う。幼女のペースは速いが歩幅は狭いので、すぐに追い付いた。
さぁ、子供らしく探検といこう。

☆

大きな庭、城のようなというか完璧に城な屋敷の中、寝室、食堂、トイレ、個人の部屋、使用人室、遊戯場、訓練場、一日で全て見回るのは無理と諦めるまでいろいろな場所を見て回った。
ルチアーノ家の何倍あるか知らないが、流石トリステイン一の貴族という感想を送ろう。豪華さも広大さも完敗だ。別に勝負してないけど。

「此処は私のお気に入りの場所よ！」

そして最後に原作でお馴染みの、小船が浮いている池に案内された。此処でサイトとルイズが乳繰り合っていたのか。

「これだけ案内すれば後は大丈夫でしょ」

そう言って幼女が芝生に寝転ぶ。僕も同じように寝転ぶことにした。使用人は流石に立ったままだ。

「まぁ、アレよ。これからは、な、なな仲良くしてやってもいいわ

よ？　一応今日からあんたも一緒に住むんだし」

夕日に照らされながら、その夕日が原因でない赤面をしながら、幼女は素直じゃない言葉を述べる。

それを聞いて僕は笑い、使用人はそんな僕達を嬉しそうに見つめていた。

「――だが断る」

「えっ！？」

しかし僕は笑顔で拒絶することにした。驚く幼女と、予想通りと言いたそうな表情の使用人。

「ここは『うん、よろしく』とか言って、夕日をバックに握手したりするところじゃないのっ！？」

「肯定です。空気を読んでください」

「ところがどっこい、ＫＹ（空気読まない）で有名なアリアさんは、気まぐれな気分屋です。思い通りにいかないのが僕という存在なの

ですよ」

溜息を吐く二人に、僕は満面の笑みで答えた。

第六話　女王様より女王様

とてつもなく広いヴァリエール家の敷地内には訓練場所もあるみたいで、今日から始まる僕の魔法訓練は、そこを使って行われるそうです。

目の前にいるのはトリステインの伝説のメイジ、烈風のカリンこと、カリーヌ・デジレ・ド・ラ・ヴァリエール。

彼女は杖を構え、仏頂面で僕を見下ろしている。

「さて、今日から私が貴方を鍛えます。反論は許しません」

まだ子供の僕に対して、大人でも腰を抜かしそうな威圧感を醸し出しながら、彼女は僕を睨み付ける。

だが、僕は脅えたりなどしない。

どう考えてもあの変態子供好き（性的な意味で）の方が怖いからだ。

あの阿婆擦れを忘れない限り、僕は戦場ですら恐怖を感じたりしないだろう。

女にされてしまいそうになる恐怖なんて感じるとは思わなかった。

あんな事がないように兄と容姿を交換する、もしくは髪を切ったり服装を変えたりして男らしくなりたい気分だ。

お母様が許してくれないので確実に無理だろうけど。

「せんせー、質問ですです」

右手を大きく上げて呼び掛ける。

なんとなく学生時代に戻った気分だ。

「はい、なんでしょう」

それに対して彼女は表情一つ変えずに返事をした。

そして僕はその返事を聞いて笑顔で彼女に質問をする。

「ルイズはおやつに入りますか？」

「（　。д　。）」

「あ、間違えた。ルイズは一緒に教わらないのですか？」

定番の質問である『バナナはおやつに入りますか？』が頭に過ぎって、質問内容と混ざってしまい、おかしな質問をした事で公爵婦人は物凄い表情をした。

そして、威厳なんて知らん、というその表情を笑わないように訂正すると、彼女はすぐに咳ばらいをして、仕切り直し、元の仏頂面に戻る。

「え、ええ。ルイズには家庭教師を雇っていますから」

「それで拗ねたりしないですか？　私もお母様に教わりたい的な」

彼女に追加の質問をすると、彼女はむっとした表情をした。

「いえ、あの娘はむしろ私からの指導を拒絶しましたから」

苛立ちながら話す姿に苦笑いをする。

そして小さな声で、「死にたくなかったんですね、わかります」と呟いた。

「何か言いましたか？」

風のメイジらしくきちんと聞こえていたようで、僕は笑顔でごまかす。

「空耳、もしくは聴覚障害です。クソババア」

訂正、おちょくる。

「い、今なんと？」

僕の言葉を聞いて、彼女は杖をへし折りそうなぐらい力を込めて握り締めている。

僕はその姿を見て笑顔のまま話を続ける。

「どうやらちゃんと聞こえてるみたいですね。さっさと授業をお願いします」

「は、はい。そうですね。うふふふふ」

濁った瞳で僕を見つめながら妙な笑いをする公爵婦人。

これは確実に怒っているようだ。

しかし彼女はすぐ様荒い呼吸を静め、いつも通りの動作に戻る。

ルイズとは違い『大人』はすぐに癇癪を起こさないんだなぁ、と僕は関心した。

「ではまずは座学を――」

そして何事もなかったかのように授業は再開された。

しかし座学と言う言葉を聞いて僕は話を聞くのをやめる。

もう僕に座学は必要ないのだ。

それを説明する為に何か魔法を使って証明するとしよう。

「ユキビタス・デル・ウィンデ」

「（　。д　。）」

なんとなく使用してみた風のスクウェアスペル、偏在は無事成功し、僕は二人に分身した。

それを見て彼女は唖然とする。

「なんとなく」

「できましたー」

「夢だけど」

「夢じゃなかったー」

二人交互に話すと公爵婦人は頭を抑えながら僕を信じられないものを見る目で見る。

バファリン使うですかー？

「さ、流石はシルビアの息子。常識が通用しませんね」

ドン引きしている烈風のカリン。

「そんなに褒めないでください」

「照れちゃいますから」

「褒めてません」

「「ぶーぶー」」

彼女は呆れながら否定した。

僕達はそれにブーイングをするが、彼女は気にした様子はない。

「とりあえず貴方は既にスクウェアレベルの精神力を持っているようですから、呪文の暗記でもしていなさい。それが終わり次第実戦

訓練をします」

そして取り繕いながら僕に命令（オーダー）を下した。

「あんちょこ見ながらって格好良くありませんか？」

「気分は千の呪文の男！」

「わかりましたね？」

「「はーい」」

睨まれたのでおとなしく返事をする。

なんでこの人いちいち怖いんだろう。

子供にぐらい優しくしてほしい。

ヴァリエールの領民は怖くて彼女に近付けないのではないだろうか。

平民の子供は睨まれたら心臓が止まるのではないだろうか。

彼女を妻にしたヴァリエール公爵は本気で尊敬する。

偏在を解除しながら僕はそんな事を考えていた。

「よろしい。いつか貴方も戦場に立つのですから、呪文の暗記は必須ですよ」

「大丈夫です。平民を盾にします」
「（　。д　。）」
「冗談ですよ」
「そ、そうですか」
「盾にするのは貴族です」
「（　。д　。）」
彼女の驚愕するなんて珍しい表情を見たのは今日何度だろうか。
「嘘ですよ」
僕は眼を反らしながら答える。
「絶対にやってはいけませんよ？」
「押すなよ絶対に押すなよ、ですか？」
「フリではありません！」
「はーい」
ぷんすかぴーと怒る彼女を見て、僕は礼儀正しく返事をした。
ちなみに戦場に出て死にそうになれば、平民だろうが、貴族だろうが、王族だろうが、男だろうが女だろうが関係なく例外なく、僕

は誰かを盾に自分の命を守ります。

きっとギャグ補正で生き延びてくれるでしょう。

我が最愛のお兄様なら生き延びるどころかエルフのように魔法を反射できるかもしれません。

「……はぁ、本当にシルビアによく似ていますね」

僕がニヤけているとチートさんが溜息交じりに言葉を紡ぐ。

「お母様は昔はどんな方だったのですか？」

僕は可愛らしく小首を傾げながら愛らしい表情で尋ねる。

「その仕草も似ていますよ」

チートさんは僕を見て笑った。

「シルビアは……そうですねぇ。とにかく狡賢い娘でした。そして王族だろうが大貴族だろうが例外なく自分らしく接する人間でした。たぶん今もそうでしょうけどね」

「自分らしく？」

「ええ、マリアンヌ様なんて跪ずいて脚を舐めさせられていたわ」

それを聞いて僕はドン引きした。

本物の女王様を奴隷にしての女王様プレイなんて女王様過ぎる。

ドSだ。

そんなお母様に似ているなんてひどい暴言としか言いようがない。

「それに魔法の才能も素晴らしかったわね。サボり癖さえなければ私なんかよりもずっと素晴らしいメイジになっていたでしょう」

僕は何も言わない。

ただ聞き始めのワクワクした態度とは真逆の心底嫌そうな表情で母親の知りたくなかった話を聞き続けている。

「貴方のお父上はそんな彼女の一番の犠牲者でした。魔法で切り刻まれ、禁止されている魔法の実験台になり、誰もが同情していましたねぇ」

お父様がドMなのはお母様の調教の結果なのですか。当然なのですか。

僕は更にげんなりとする。

「貴方はそんな両親から生まれたんですよ」

嬉しくない。全然嬉しくない。

「ですが、あの二人のようには育たないように清く正しく成長してくださいね」

苦笑を浮かべながら言われた言葉に、僕は力強く何度も頷いた。

これからは少し自重しよう。

第六話　女王様より女王様（後書き）

初期設定ではアリアは女の子でした。わざわざ男にしたのは百合好きっていうか百合な作者が男の娘×女の子から女の子×女の子を好きになってもらえないかなぁとか考えたからです。

嘘です。本当は僕っ娘で書いていたら男の娘になっていただけです。

第七話　僕とルイズと時々メイド＋α

◇危険なフランシア

「なんかこう……、世界中が鼻で笑うようなくだらないことがしたい」

「なにそのくだらない願望」

ごろごろとベッドの上で言った僕の独り言に、椅子に座りながら本を読んでいたルイズが呆れながら突っ込む。

くだらないとは失礼な。

「――僕は王族も貴族も平民も、みんな関係なく、全員を笑わせたいのですよ」

キリッと真面目な表情でルイズの方を見つめながら言葉を紡ぐ。

「その言葉だけ聞くと立派よね。その前に言った言葉で台なしだけど」

しかしルイズは態度を変える事なく残念そうなもの見る目で見つめ返すだけだった。

「肯定です。お嬢様はもう少し考えて発言を――」

「うるさいですよ、ショタコン」

そしてフランシアが畳み掛けるように僕に説教をしようとするが、僕はそれを遮る。お説教は勘弁です。

「しょたこんって何よ？」

僕の言葉を聞いていたルイズが首を傾げる。僕はそれを見て『容姿や動作は可愛らしいが性格が残念だよね』と心の中であまり関係ない事を呟いた。

「ねぇ、なぁに？」

「幼い少年を性的に愛する変態でございます」

いつまでも答えない僕に苛立ちながらルイズがもう一度尋ねると、僕の代わりにフランシアが答えた。

ルイズはそれを聞いて顔を真っ赤にする。耳年増発見です。

「な、ななな」

「もちろん、私はショタコンではありませんよ。ただのロリコンです」

「えっ？」

顔を赤らめながら焦るルイズにフランシアは更に追撃する。

それを聞いて僕は思わず声をあげてしまった。

「ろ、ろりこん？」

ルイズは理解できなかったのか不思議そうな表情でフランシアを見る。

「幼い少女を性的に愛する変態でございます。ぶっちゃけた話をさせていただきますと、生まれた瞬間から二十歳になるまでの女性が私の守備範囲です」

「「えっ？」」

無表情で淡々と告げる使用人の言葉に僕達は揃って疑問を浮かべる。

……同性愛者？

「ガチレズと呼ばれる同性愛者ですね。あ、お嬢様は別ですよ？」

僕の予想は当たっていたが、更に斜め上の追加も存在した。

えっ、狙われてるの？

僕は数日前の事を思い出してすぐにベッドから離れ、ルイズの後ろに移動する。

「あばばばば」

「あ、あんた、なんて使用人連れてくるのよっ！」

ルイズも脅えているようで、僕の身体を揺らしながら焦り出す。

「僕は男だから幼女の方をオススメするですよ！」
「ちょ、あんた、普通は男なら女を守る場面でしょ！？」
「む、無理！　あの人ガチで怖いから！」
「いつも人を振り回してる癖に！！」
「受け身は苦手なのですよ！」
ぎゃーぎゃーわーわーと喚きながら、僕達はお互いを生贄にしようと彼女の前に突き出し合う。
そんな僕達の様子を見て、フランシアは溜息を吐いた。
「心配しなくても手を出そうなんて考えておりません」
その言葉を聞いて僕達はぴたりと止まる。
「ほ、本当に……？」
「ええ、本当です」
ルイズが恐る恐る尋ねるとフランシアは笑顔で頷いた。それを聞いて僕達はお互いを抱きしめ合いながら、ほっと安心する。
「そういえば、この前のアレも冗談だったもんね」
僕は胸を撫で下ろしながら彼女に笑い掛ける。すると、彼女も同

じように僕に向かって微笑んでくれた。

「――いえ、私がガチレズでロリコンなのは事実です」

舌舐めずりをしながら蛇のように僕達を見定める目に僕もルイズも身体が強張る。

「「助けてーっ！」」

そして次の瞬間には二人一斉にドアを開いて、一目散に駆け出し、全力疾走で逃げ出した。

「子供というのは本当にからかいやすいですね」

僕達がいなくなった部屋にはクスクスと一人で笑う使用人がいたそうな。

◇エレオノールの悩み

エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。ヴァリエール三姉妹の長女で、現在１６歳。魔法学院に通っているらしいが、現在休暇中で実家に帰って来ている。

そんな彼女が何故か僕をじっと見つめたまま動かないのは何故だろうか。

「あんた名前は――」

「アリアです。アリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ。気軽にアリア様でいいですよ？」

「なんで私があんたを様付けで呼ばなきゃいけないのよ」

観察していたような瞳が睨む目付きに変わる。流石烈風のカリンの娘と言った感じの威圧感を沿えて。ちなみに、ぎゃーぎゃー喚くルイズよりも落ち着いているが、こめかみに青筋が浮かんでいる事から、相当怒っているのがわかる。

口調は落ち着いてるけど、表情は今にも噛み付いてきそうな程獰猛だし。

「あんた、確か男よね？」

殴り掛かりそうになっている握り拳を反対の手で掴み、怒りを抑えながら尋ねるエレオノール。金色の髪がメデューサみたいにうねり出しそうだ。

「ああ、服装ですか？　お母様の趣味です。似合いますか？」

僕はそんな様子を気にせず、スカートをふわりと翻しながら一礼をする。

「それ、嫌じゃないの？」

僕の行動を見てエレオノールは理解しがたいものを見る目で僕を

見る。

オカマやろうだと勘違いしているのでしょうか。

「嫌ではねぇですよ。自分の服装や髪型を気にした事はないですから。あ、でもパンツスタイルが似合わないのはちょっと残念ですね。スカートは寒いので」

ひらひらとスカートを摘み上げながら苦笑を浮かべる。

女の子になりたいなんて考えた事はないが、男らしくなりたいと考えた事もない。この格好が好きという訳ではないが、嫌いという訳でもない。つまり、どうでもいい。

僕の言葉を聞いて、エレオノールは溜息を吐いた。

「あんたに聞こうとしたのは間違いだったみたいね」

「何をですか？」

「えっ、いや……その、」

エレオノールは僕の質問にしまった、という顔をする。

おそらく何か悩みがあってそれをバレずに相談したかったのだろう。

「何か悩みがあるのなら僕が解決してあげましょう。恋のキューピッドなんかもお任せくださいです」

「なっ――」

僕の言葉にエレオノールは顔を真っ赤にする。

まさかの恋愛相談ですか。

前世では紹介しても全カップル上手くいかなかった僕ですが、今回ばかりは独神エレオノールを救って差し上げましょう。

「友達の話なのだけれど――」

エレオノールは恥ずかしそうに語り出す。

友達の話＝自分の話な法則ですね。

３０分掛けてエレオノールが語った内容によると、こんな感じでした。

?学院に好きな人がいる。
?その人が女の格好をした弟の話ばかりする。
?もしかしたら『そっち』の趣味なのかもしれない。
?振り向かせるにはどうすればいいのだろう。
?ついでに参考の為に貴方の兄の好みの服装とかタイプとか教えてほしい。

ま　さ　か　の　フ　ラ　グ　！

どう考えてもエレオノールが好きなのは僕のお兄様ですね。

「……」

無言で僕の答えを待つエレオノール。

どうすればいいのだろう。

「えっとおにい――じゃなくて、たぶんその人はストレートですよ。ただ家族が好きなだけかと。だから普通に女の子が好きだと思います。それと振り向かせる為には積極的が一番だと思います。あと、お兄様の好みのタイプとかは知らないです」

「そ、そう？　こほんっ……そうね、友達にも言っておいてあげるわ」

エレオノールは嬉しそうにニヤけるが、僕が目の前にいる事を思い出すと取り繕いながらごまかすように咳ばらいをする。

「ま、まぁまぁ参考になったわ。たぶん友人も感謝していると思うから」

そしてそのまま急ぎ足で立ち去っていった。

後日、兄から女好きの変態とエレオノールに罵られたと手紙が届くのはまた別の話。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4963x/

うさぎさんの楽しい毎日

2011年10月30日00時47分発行